

自らレフェリーとしてリングに上がる異色トレーナー。

ロンドンオリンピックに湧いた今年の夏だったが、ウサイン・ボルト選手に代表される記録に挑むアスリートは、彼等を支えるトレーナーとともに自分のコンディショニング大会でピークに持って行く努力をした。その努力が世界中を驚かす世界記録や、大会2連覇というパフォーマンスに結実したのだ。このようにアマチュアスポーツの世界は、4年に1度のオリンピックというピークを目指すのだが、プロスポーツの世界はそうではない。すべての試合がある日をピークにしなければならぬ。純粋に記録がすべてのアスリートとちがいで、プロスポーツ選手は観客あつての仕事だからだ。特にプロレスのようなハードな格闘技の世界では、選手自身を預かるトレーナーは、アスリートとは別の技術とノウハウが必要になる。

高久裕先生は、プロレスに魅せられ、興行のある日は自らレフェリーとしてリングに上がる、異色のトレーナーだ。彼が活動しているのは、ドラゴン殺法で一世を風靡した藤波辰爾選手が主宰する団体「ドラ

ディション」で、遠征時はもちろんのこと、日頃から藤波選手他、長州力選手、初代タイガーマスク選手など、日本プロレス界のレジェンドたちの身体をメンテナンスしている。試合がない日には、北豊島医療専門学校広報部長であり、柔道整復師の先生として、一般の患者さまの治療も行う。午前中は45キロほどのお年寄りの身体を診て、午後は藤波選手ら100キロ近いプロレスラーたちの身体と格闘する。

「確かにすごいギャップがありませぬ。私はもともとプロレスのレフェリーとしてこの世界に入り、選手の身体をサポートする手伝いをしているうちに、トレーナーになりました。我流ではなく、きちんと学びたいと思い、柔道整復師の免許をとったんです。普段の日の午前中は一般の人も診ているのですが、そのときのほうが緊張しますね。身体の構造は同じですが、そのパーツはまったくちがう。知れば知るほどプロレスラーのみなさんの身体は驚異です。藤波さんは来年末で還暦を迎えるんですが、世間でいえば退職する年齢ですよ。それがリングに上がって闘うのですから、常識では考えられない肉体をしています。筋肉のハリやツヤは素晴らしい。それ

は日頃のトレーニングやメンテナンスの賜物だと思います。ファンのために少しでも長く現役を続けて欲しい。そのためにも、私が少しでも貢献できればいいと思っと思っています」と話す高久先生。高久先生は、58歳のレジェンド・レスラーである藤波選手を支えるかけがえのないスタッフとして誇りを持って仕事をしています。

プロレス黄金時代の復活を目指すレジェンド・レスラー。

そんな高久先生に日頃から身体

YUTAKA TAKAKU

高久 裕

- 1975年 栃木県生まれ
- 1994年 谷津嘉章主宰のSPWFプロレス入門
- 1995年 レフェリーデビュー
- 2007年 藤波辰爾の無我ワールドプロレスリングに参加
- 2008年 第16回柔道整復師(国家資格)取得
- 2011年 藤波辰爾、長州力、初代タイガーマスク率いるレジェンド・ザ・プロレスリングに参加
- 2012年 現在、ドラディション、レジェンド・ザ・プロレスリングでレフェリー、トレーナーをつとめる



不屈のドラゴンを支えるトレーナーは、ヒーローの口役。

メンテナンスを受けている藤波選手は、アントニオ猪木選手とともに新日本プロレスの黄金時代を築いたスター選手だ。100キロを超すヘビー級が主流であった日本のプロレス界で、スピードと技の切れを身上として、ジュニアヘビー級のチャンピオンとして、新しいプロレスの魅力とファン層を開拓した。そのファイティングスタイルと名前から、ドラゴン藤波として人気を博し、必殺技であるオリジナルスープレックスは、ドラゴンスープレックスとして対戦相手から恐れられた。その後、ヘビー級に転身。1981年から83年にかけて、維新軍団の総帥として頭角を現していた長州力選手とライバル関係になり、長州選手とのシングルマッチは「名勝負数え歌」として、当時のファンを熱狂させた。

現在、その長州選手、初代タイガーマスク選手とともに、「レジェンド・ザ・プロレスリング」を開催、往年のプロレスファンを再び呼び込む白熱した試合を見せている。「僕を含めて3人も50代、60代という年齢で、試合前の身体のケアは若い頃より入念にしておかないとリングでいいパフォーマンスは

できません。そこで高久くんが存在はありがたい限りです。僕らの体調を診てくれていながら、リングではレフェリーの仕事もこなしてくる。彼がやっていることができてくると、遠征があれば必ず同行してくれ、ごまごまと僕らの世話を焼いてくれます。また若い選手たちにはトレーニングの仕方やストレッチの仕方なども教えてくれるし、僕にとっても、会社にとっても得がたい存在となっています」と藤波選手は高久先生の仕事ぶりを高く評価している。

レジェンドたちの言葉で、レフェリーから柔整師を志す。

もともとプロレスのファンであった高久先生は、同郷の先輩レスラーに誘われて、プロレスの世界に飛び込んだ。そこで、レフェリーになり、試合におけるサポーターや先輩レスラーたちの付き人など、さまざまな仕事をこなしてきた。当時のプロレス界では専門のトレーナーといわれるプロは常駐しておらず、選手たちが自分たちの身体を、自分たちの手でメンテナンスしなければなら

なかった。そんななかで、高久先生もプロレスラーたちのメンテナンスの手伝いをするようになり、やがてトレーナーの仕事も自然とこなすようになっていった。そして4年前に、一念発起して柔道整復師の資格を取得し、本格的にトレーナーへの道を歩むようになる。そのきっかけとなったのは、レジェンドたちや藤波選手の一言だったという。

TATSUMI FUJINAMI

藤波 辰爾

- 1953年 大分県生まれ
- 1970年 日本プロレス入門
- 1972年 アントニオ猪木の新日本プロレス旗揚げに参加
- 1982年 WWFインターナショナルヘビー級王座獲得
- 1989~90年 椎間板ヘルニアで長期欠場
- 復帰を機にリングネームを「藤波辰巳」から「藤波辰爾」へ
- 1999年 新日本プロレス社長に就任(～04年)
- 2006年 「無我ワールドプロレスリング」のトップに就任
- 2008年 「ドラディション」のトップとして活躍中

日本のプロレス界に燦然と輝くドラゴンの星、藤波辰爾。

58歳という年齢にも負けず、いまま現役レスラーとしてファンの

熱い声援に応えるファイトを見せてくれている。

そんな藤波選手を支えているのが、トレーナーの高久裕先生。

レフェリーとしても自らリングに立ち、プロレスを、プロレスラーを支えているもう一人のヒーローだ。

そんな高久先生と藤波選手に、普段はうかがいしれないレスラーの身体と、トレーナーの役割についてうかがった。



レスラーの身体は驚異ですよ。試合直前にはまるで別人になってしまう。

経験とカンのマッサージから、診断・治療するプロのトレーナーへ。

高久先生は、免許取得後の自分の変化をこう分析する。

「確か、藤波さんも私にすすめたのだと記憶しています。プロのトレーナーになるために資格をとって。私も自分でやっているマッサージなどが本場にこれだけの力かという疑問もあり、それならきちんと勉強してみるかというノリで柔道整復師の資格を取得しました。とる前ととってからでは、自分のやり方も大分変わったと思いますよ。それまでは経験とカンでやってきたものが、きちんと解剖学の理屈の上で行えるようになったことが自分としては一番の進歩でした。同じ腰痛でもどこから来ている腰痛かを診断すれば、治療方法も変わってきます。また人によって、筋肉の疲労度や回復度もちがうので、その人の身体やコンディションに合った方法を考えるようになりましたね。」

団体内にプロのトレーナーがいる心強さを実感。

その変化をそばで見ていたのが藤波選手。高久先生がいうように、柔道整復師の免許をとれとアドバイスした恩師でもある。藤波選手は長いプロレスキャリアのなかで、幾度となくケガをして、試合に出られない経験があった。

1989年のビッグ・ベイダーとのシングルマッチで腰を負傷。椎間板ヘルニアを発症して、その後1年3カ月の長期欠場となってしまった。「レスラーなら、何かしらの持病をかかえながらリングに上がっているのが普通ですよ。まったく痛みがないという状態で試合ができるのはとても稀なことです。痛みにつきあひながら、なだめながら、どう試合をするか考えるのがプロレスラーなのです。試合を楽しみ待ってくれる観客の方がいる限り、リングに上がろうとするのは、僕たちの性ですね。僕が新日本プロレスにいた頃は、年間200くらゐの試合が

ありました。東京でやっているときは、行きつけの先生に診てもらえるのですが、地方遠征に出してしまうとそれができません。地方の試合で大きなケガをした場合は、その土地の病院や治療院に行きますが、さほど大きなケガでない場合は、自分たちで治していました。病院や治療院にかかっても、すぐ翌日には別の街へ行ってしまおうので本場に

応急処置くらいしか対応してもらえませんでした。ですから試合をしなからケガを治していくしかない。大きな骨折とか、歩けないほどのケガ以外は試合に出ています。こんな経験をしていたので、身内に治療ができるトレーナーがいることは、とても心強いことなのです。僕が高久くんにも柔整師になることをすすめたのも、そんな理由があったからです。自分の身体のことを分かってくれている人間が、試合前も試合後も常についてくれるのは、とてもありがたいこと。遠征に出ると長州選手なんかは高久くんを一人占めして放さないですから笑」と藤波選手はトレーナーの重要性を教えてくださいました。

「藤波選手もそうですが、特に長州選手の場合は顕著ですね。試合の数日前にトレーナーとして身体を診ていると、筋肉などがポロポロで、これで大丈夫なのかと心配する時があるんです。それが試合の当日にはまるで別人のような身体になっている。試合が近いことを筋肉が知っていて、自ら修復しているのしか思えないですね。そして試合が終わればまた元に戻っている。本当にこの人たちの身体はどうなっているんだと思うことがたくさんあります。また練習のときには、痛がって動きも鈍いのに、リングの上でスポットライトを浴びればみんな颯爽として動き回る。レフエリーとして一緒にリングに上がり間近で見ていると、ついさっきまであれほど痛がっていたのがウソのようにフアイトしている姿がある。これは私が何回も体験していることですが、本当に不思議ですね。学校では教えてもらえない人間の身体の神秘といえるでしょう。」

観客がいるスタジアムでは、レスラーズ・ハイになる。

「高久くんが不思議に思うのも、もつともだと思えますよ。やはり僕たちは観客の声援とスポットライトのなかという、アドレナリンが放出されるというか、少しらしい痛みなど飛んでしまうのです。かつて、相手を殴ったときの衝撃でこぶしの骨が陥没してしまっただけですが、それでも試合を続けました。結局、医者へも行かずに冷やすだけで治してしまっただけですが、いまでも骨はありませぬよ（そういつて骨が陥没したままのこぶしを見せてくれた）。よく長距離ランナーが極限状態になると、辛さが気持ちよさに変わるといいますね。ランナーズ・ハイというやつですが、私たちレスラーも似たようなものだと思えます。練習のときは痛くて動けない人も、観客でいっぱいになったホールに一步踏み出せば、そこはレスラーズ・ハイの世界に入るわけです。いま

スポーツトレーナーなら、選手を誰よりも愛すること。

まで身体が制御していた痛み、のりミッターがはずれるというか、やるぞーという気が全身にまわるといっつか、何かスイッチが入る状態ですね。これはたぶん、相撲や柔道、ボクシングをする人も、同じような感覚があると思えますよ。見る人のいない普段の練習では、試合のような殴り合いや蹴り合いなどできません。それは普通に痛いんですからね（笑）。そういう意味ではプロレスを成立させている多くの部分は、観客のみなさんが担っているわけです。歓声、怒号、悲鳴、拍手、笑い：そうした臨場感ある音や空気に僕たちは反応するのでしょね。」

うに自分の夢を実現したいと願う、スポーツトレーナーを目指そうとしている人たちにメッセージを贈ってくださった。

「チャンスは、いつ、どこにあるのかは分かりません。でも、けつして諦めないこと。本当にそれを目指している人なら、きっと見つけられるはずですよ。そして、みなさんがスポーツトレーナーになりたいなら、担当する選手を誰よりも愛してください。試合で活躍できるように、いい記録が出せるようにいつも願っていてください。そうした気持ちは必ず選手に伝わり、言葉を越えた信頼感が生まれてくるでしょう。それが何より大切なことだと私は思いますね。」

一流の治療家たちは、みな、口をそろえて「必要なものは技術だけでなく、精神的な部分で、患者さまを愛せるかどうかだ」と語る。それは、超人の域に達したレジエンドを相手にするトレーナーといえど、変わらない普遍的なものかもしれない。

遠征のときには病院にも通えない。治療家がそばにいてくれるのは心強いです。

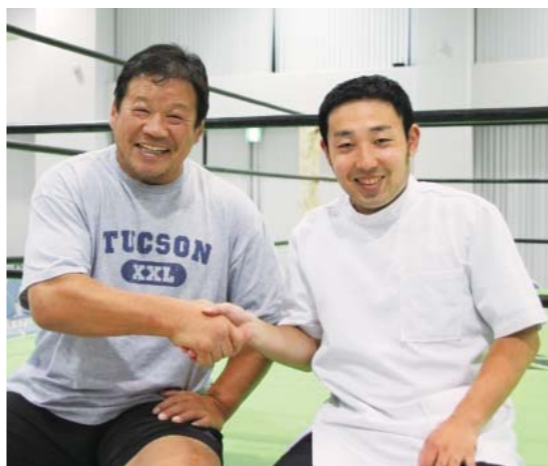
大会情報

2012年

11月22日(木) 19時～
ドラディション 東京 新宿FACE
11月25日(日) 17時～
ドラディション 新潟県佐渡市 相川町民体育館

2013年

1月13日(日) 12時～
LEGEND THE PRO-WRESTLING
東京後樂園ホール



想像を超えるポテンシャルを秘めたレスラーの身体。

長くレスラーの身体と向き合い、そのポテンシャルの強さを知り尽くしている高久先生でも、ときとして解剖学の常識を超えるような出来事に遭遇するという。

